新製品開発ストーリー

長年にわたって培った技術を応用して高齢者の見守りシステムを開発

セキュリティ機器メーカーのキング通信工業は、新しい事業を創出するべく、高齢者の安全を守る画期的なシステムの開発に成功した。

城南地区

キング通信工業株式会社

設立年：1968年
資本金：3億9,721万円
代表取締役社長：茂木　俊介
従業員数：236名
（内、女性従業員数49名）
〒158-0092
東京都世田谷区野毛2-6-6
TEL　03-3705-8111
https://www.king-tsushin.co.jp

主体的に新事業に挑むキング通信工業の若手社員の皆さん

高齢者見守りシステムの開発リーダーに抜擢された吉村真人さん

高齢者の安全を見守るシステム開発に挑戦

安全、安心が声高にいわれる時代、侵入防止などに活用されるセキュリティ機器は社会に欠かせない存在となっている。1968年設立のキング通信工業は、オフィス&ホームセキュリティに関わる各種センサー、コントロールパネル、防犯カメラなどを開発し、警備会社や商業施設などに提供してきた。

「これまでは順調に事業拡大してきましたが、少子化を考えると警備関連の機器だけで安定経営は続けられないだろうと、自社技術を転用できる分野を模索してきました。その結果、行き着いたのが介護市場です。『高齢者見守りシステム』はその第1弾です」と語るのは同社の茂木俊介代表取締役社長である。「高齢者見守りシステム」とは、壁に取り付けたセンサーが物体までの距離を測り、それを集約して人間の動作を認識するというもの。これで高齢者がベッドから転落しそうな動作を認識。その画像データは通信でタブレット端末にリアルタイムで送られる。危険な動作の場合はアラームで知らせ、すぐに介護者が高齢者の居室に直行して転倒などを防止するというものだ。

保有技術を応用して操作性の高いシステムを開発

「高齢者見守りシステム」の開発プロジェクトが立ち上がったのは2012年。「高齢者見守りシステム」のプロトタイプを開発し、福祉施設に意見を聞くところから始まったという。

「介護士の皆さんは忙しいですから、手間がかからず、扱いが簡単でないと普及は難しいというのをテーマに取り組みました」

そう語るのは、同プロジェクトを統括した営業統括本部事業開発課の吉村真人係長。いくつもの技術的なハードルを乗り越えるなどプロジェクト全体を指揮していった。そんな吉村さんに朗報が舞い込む。プロジェクト内容が認められ、2013年に経済産業省のロボット介護機器開発・導入促進事業に採択されたのだ。これによって補助金を受けるなど開発に弾みがつく。そして2014年末にようやく「高齢者見守りシステム」が完成する。

「完成後は営業の推進リーダーという重責を担うことになりました。多くの高齢者の安全を守れるように日々営業活動に励んでいます」

吉村さんにとってはわが子のような「高齢者見守りシステム」を世に広めるために、足繁く福祉施設などに通い、すでに多くの施設で導入されている。

トライアンドエラーの末に完成度の高いシステム開発に成功

「高齢者見守りシステム」には、複数の若手社員も参加している。開発技術部の村平宏太さんのその一人である。

「物体までの距離を赤外線で測って物体の形を認識するのですが、物体特性によってノイズが発生して正確な形を認識できなかったんですね。その原因を突き止めて改善できましたが、クリアした時は格別の喜びでした」

大きな達成感を得られたと喜ぶ村平さん。今は新たな画像処理開発に取り組んでいる。

開発技術部の遠藤可奈子さんは、タブレッド端末の操作性向上に取り組んできた。もっとも配慮したのが分かりやすい画面レイアウト。より多くの人に利用してもらうため汎用性の高いiOS、Android、WindowsのOS 3種類のアプリケーション開発に臨んだ。

「それぞれのプログラミング言語を使って開発するために、まずは開発言語を習得することから始めました」

苦労が多かった分、App Storeなどに自身が開発したアプリケーションが配信された時は大きな達成感を得たという。そんな遠藤さんが現在、携わっているのは「高齢者見守りシステム」の次期アプリケーション。社内の信頼を獲得し続けるために、開発の日々を送る。

博士号を持つ村平宏太さんはセンサー精度や画像処理の向上で貢献

若手社員が専門知識を活かしながら活躍するキング通信工業

使いやすい高齢者見守りシステム開発を心がけたという遠藤可奈子さん

茂木俊介社長

編集部「ハツタロー・ケンジロー」メモ

専攻分野を考慮した配属が組織活性化につながる

理系学生が大学で専攻した分野に直結した仕事に就けるとは限らない。とくに大手企業ともなると業務は細分化され、学生時代に身につけた知識や技術が活かされることはそう多くはないといわれている。ところがキング通信工業の若手社員の多くは、専攻分野に直結した仕事に就いている。村平さんと遠藤さんも画像処理やソフトウェア開発という学生時代に学んだ知識を活かしながら活躍している。

「画像処理の開発に携われるのは入社動機の一つでした。自分の興味のある分野を究めていくのはモチベーションにもつながります」（村平さん）

本人の希望を優先して配属するのが同社の伝統。しかも若手社員にも責任ある仕事を任せるのも同社の社風の一つ。こうした企業風土の中で、自らの夢や目標に向かって主体的に働く社員が多く、それが同社の活気にもつながっているようだ。

▶さらに詳しい会社情報は　東京カイシャハッケン伝! サイトへ ≫